

ロマンティックな愚か者

古時計製作機械に魅せられて

中世以降、ヨーロッパの時計職人は一流の技術者として名高かった。同じ技術者の上瀬千春は、彼らが持つ道具に心を奪われた。

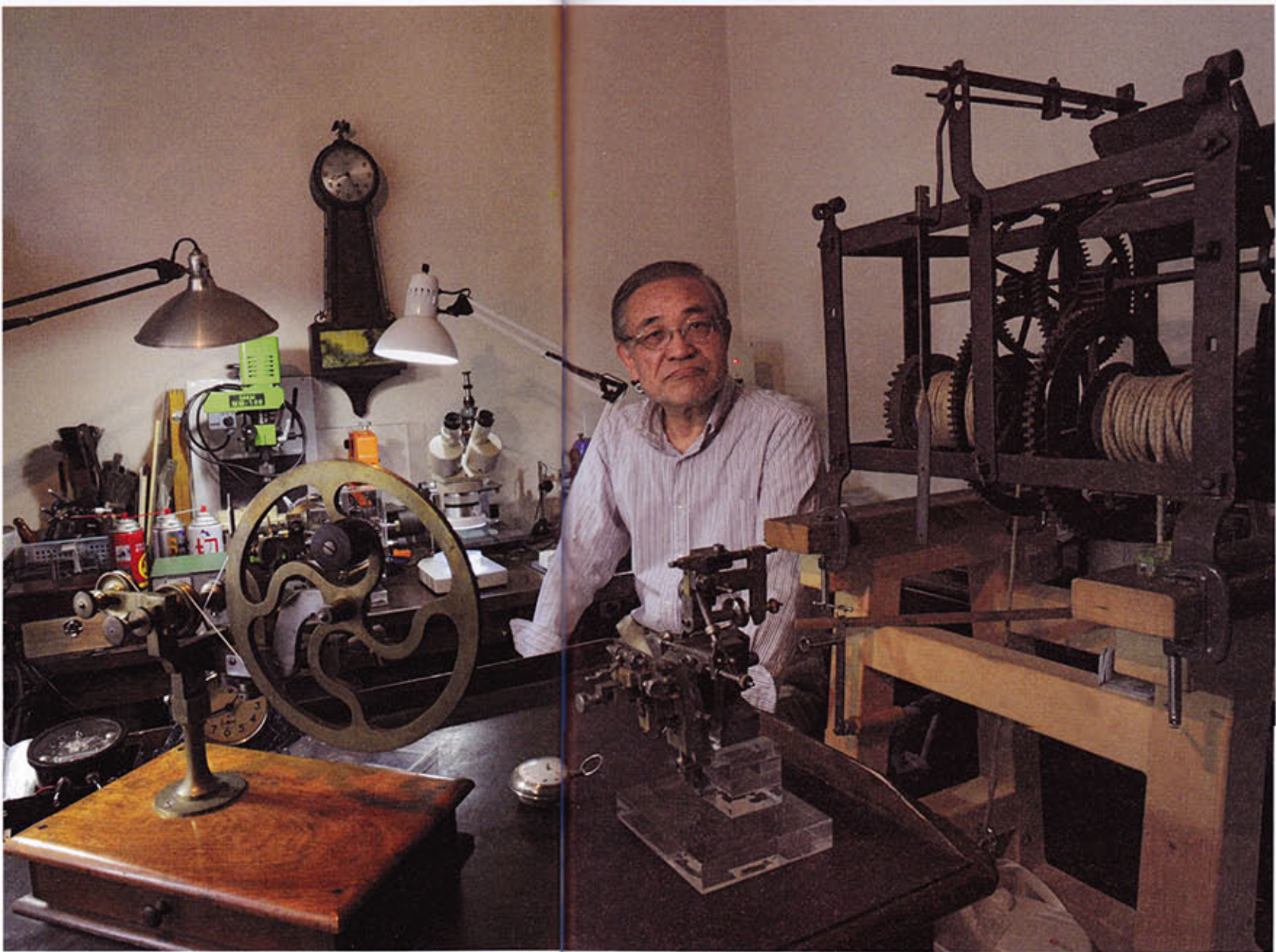
〈ゲスト〉

古時計協会会長
古時計製作機械コレクター

上瀬千春

Chiharu Kamise

○かみせ・ちはる 一九四七年
岐阜県生まれ、東京電機大学卒
業。六五年科学技術庁航空宇宙
技術研究所(現JAXA)に入所。
卒業後、七〇年フジテレビジョ
ン入社。現在、同社技術開発局
執行役員技師長。二〇〇九年か
ら古典時計協会会長も務める。



歯車をつくる機械。これ1台でさまざまな大きさの歯車をつくらることができる

世

の中には懐中時計や柱時計、腕時計のフォルムに魅せられて、稀代のコレクターになった人は多いが、今月の御仁は十七、十八、十九世紀の時計職人の工房で活躍した古い時計製作機械のコレクターなのだ。フジテレビジョンの執行役員技師長の上瀬千春さんは、仕事上、若い時からテレビの技術革新の会議のため、よくスイス・ジュネーブに行っていた。そんな中、雷光に打たれたような体験をした。モンブラン橋のもとにある、きらびやかなパセロン腕時計を引き立たせるために並べられている、十九世紀の歯車切りの機械を見た瞬間、上瀬千春の心は痺れた。その真鍮のフォルムの美しさと風格に感動し震えた。

型歯車を切る機械を見つけた時、ジュネーブの時計店のおやじがいった。

「これはわたしが昔、時計師だったころの記念のものだ。だからいくら金を出してもらっても、売るわけにはいかならぬ」

それで引き下がる凡庸な上瀬ではなかった。五年間毎年通い続け、ついに古い貴重な製作機械をゲットした。上瀬の情熱に根負けした時計師がしみじみといった。

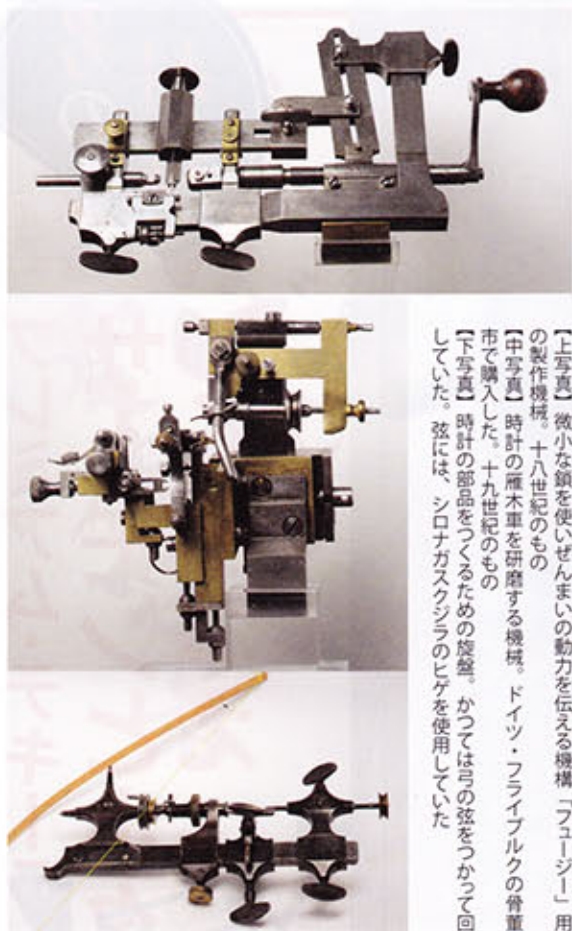
「同じようなものをもう一つ友人がフランスで見つけたので、わたしはそれを手に入れるから、君はこれを持っていけ。君もこれで自分の『時』をつくってみるか」

ちょうど同じ頃、十八世紀のポケットウォッチの掘り出し物を、週末のジュネーブの蚤の市で買った。見てくれば古い古時計をホテルで分解してみると、正確に動くための部品が欠落していた。

「道理で安いはずだ」と上瀬は、一旦は落胆するものの、常人ではない好奇心がムクムクと湧いてきた。

「ようし、あの綺麗なフォルムの時計製作機械を買って、自分で直してみるか」

しかし、時計製作機械は金を積みあげて手に入るものではなかった。喉から手が出るほど欲しいパージ脱進機用の冠



【上写真】微小な歯を使わずに動力を伝える機構「フュージー」用の製作機械。十八世紀のもの
【中写真】時計の歯車を研削する機械。ドイツ・フライブルクの骨董市で購入した。十九世紀のもの
【下写真】時計の部品をつくるための旋盤。かつては弓の弦をつかって回していた。弦には、シロナガスクジラのヒゲを使用していた